

随想 『秘花』

秋月 香璃

「ある遊女が男と恋に堕ち扇を取り交わして将来を約束し、別れる。女は恋い焦がれるあまりに狂女の班女となつてさまよい歩き、京の都にたどり着く。一方、東国からの帰途に宿を訪ねた男は、女がいないことを知って落胆する。京に戻り、下加茂神社に参詣した折り、偶然にもその場に班女が現れる。恋の願いを叶え給えと神に祈り、心乱れて扇を繰り、舞を舞う女の扇に見覚えがある。互いの扇を見て、探していた恋人だと分かり、喜び合う。思慕、絶望、歓喜。沈黙の中で、言葉にならない感情を、抑えきれない心の震えを、手にかざす扇の繊細な揺れで表す。」

「能」とはなんと美しい世界であろう。確か二十代の頃に読んだ。これが私の能への憧憬の始まりだった。

『秘花』には、この『班女』を作成した世阿弥の波乱の生涯が描かれている。先生が八十五歳の時の作品で、本の帯には、「——能の大成者・世阿弥。彼が佐渡へ流されたのは、七十二歳の時だった。それから八十過ぎまでの歳月の中、どのように逆境を受け止め、老いと向き合い、そして死を迎えたのか——」とあった。一筋に進んできた道が間違っていたのだと激しく後悔をしたのではないか。失意の底で非業の死を遂げたのではないか。死を迎える最期に何を思ったのだろうか、そんな関心を抱いてこの本を手にしたのだったが、ただそれだけではないというのは冒頭の「序」で理解した。先生がこの作品を書き始めるのに三年の歳月が消されたという。三年もの間、鶴ぬえと死闘を続けて

きた。鶴こそ世阿弥の心の闇だと思い、「犯されまいと抗ったのではなく、犯されたくて夢の中で身悶えていたのではなかったか」と気がついた時「ようやく、私の錆びかかったペンが、たつぷりとインクを吸い上げていた」のだった。先生が死闘を続けていた鶴とは一体何だったのか。鶴を象徴するものの正体が何かをつかめないまま、私は読み始めることになってしまった。

若狭の小浜を出て佐渡に配流される船の中で、世阿弥は七十二年生きてきた歳月を振り返りなぞっていく。能役者としての自信も、榮譽も、人間としての尊厳も、ある朝突然、將軍足利義教の沙汰一枚で根こそぎ覆された。

海は風いである。「いつの間にか自分の右手の指が膝を打ち、櫓のきしみの音の拍子を取っている」。大和申楽観阿弥の子として生まれたその日から申楽一筋の道だった。京に進出し、卑賤と蔑まれてきた申楽の芸で將軍や帝や貴顕たちに有無を言わせぬ感動を与えてみせたいという父の野心を一身に背負い、常住座臥、すべての立居振舞を、申楽の稽古として厳しく躡けられてきた。漢詩・和歌・連歌・古典の物語・蹴鞠などは興福寺の僧らから学んで習得した。

美しく才ある十二歳の藤若（世阿弥の幼名）は、今熊野の演能で大樹（將軍足利義満）に見いだされ、一座の人氣は一躍上り詰めていく。同時に最高の政治家であり文化人である公家の准后（二条良基）にも寵愛され、すべてが勢い付く上向きの男時（おどき）である。しかし、大樹の愛を受けるほど屈辱が内に積もり、素直には喜べない忸怩たる想いは澱のようによどんでいる。また公家や武家の嫉妬や怨嗟的になっていくのであった。

かつて先生は、「見るべきものはすべて見た」と書いていた。世阿弥もまたそういう人だったのだろう。

「これからは、知識人として貯えてきたわが教養のすべてを、藤若の頭脳と軀の中に注ぎ込んでやろう」という准后に、「かたじけのうございます。」と答えたうえで、

「そういう真面目な話を、裸の五十六歳の老体と十三歳の未熟な少年が閨の陸言として交わしていることが、ふとおかしくなった。そんなふたりを私の中のもう一対の双眼がじっと見据えている。父（観阿弥）の教える『離見』とはこういうことなのではないか」とし、また、

「下賤の生まれや育ちのわれらには、あまりに率直な心情や、感動は、まず気恥しさに気おくれし、何かと憚られ

ることが多く、そのまま口になど出来るものではない。上流の方々にはわれらに共通した恥の觀念が欠如しているように見受けられた」と、まだ若い美童の世阿弥にそう思わせているのである。

小浜を出航した船は、碧く濃く昏く底知れぬ深さを湛えた海のあら波を分け入り、約二十日間をかけて佐渡に向かう。息子たちと同じくらいの年齢の見張役は、船酔いにひどく苦しんでいる。船の揺れを映すかのように世阿弥の心も時に激しく乱れる。栄光の日々は長い生涯の中で「ほんの昼寝の夢ほどの短いものであった」と回想する。大樹の関心は三、四年の内に近江申楽の犬王に移り、北山第で後小松天皇の行幸があつた際には、二十日以上も申楽の天覧があつたにも拘わらず、一度も舞台にお呼びがなかつた。やがて二十二歳で父観阿弥を喪い、その四年後に准后も身罷つた。盛運衰えることを知らなかつた大樹も五十一歳で急逝する。次の將軍足利義持は田楽の増阿弥を愛好した。將軍の鑑賞眼にも世の移り変わりと共に変化があるのは当然のことだつた。

一方で、実子元雅（長男）に芸を継がせたいという身び

いきから、すでに『風姿花伝』も手渡して後継と決めていた養子元重（甥）を厭わしく思うようになり、疎遠になつていく。その頃には元重に男時の勢いがつき、人気も実力も貯えていた。後継者の立場は実子に収まつたものの、觀世座は日一日と翳りが濃くなり、斜陽の一途をたどつていた。六十七歳の時、將軍義教から仙洞御所への参内を禁じられた。翌年、実子元能（次男）が出家し、二年足らずの内に元雅が殺されるという悲劇が重なる。元雅に伝えるために書いた芸論のすべては「芳醇な無駄」であつたと、世阿弥は逆縁の悲しみに慟哭する。老いのはてに落とされた悲惨な境涯。「鶴」はこの絶望の中から生まれた作品である。

佐渡に上陸した世阿弥は気づく。自分がまさしく流人であり、十分に生きすぎた命である。配処の余生こそ世阿弥は抹殺し、沙弥善芳として生き直す決意をする。出家した元能が残した『申楽談儀』の奥書を思いだし、自分は何も気づかないまま、大切な人や事態をぞんざいに見捨てて来たのかもしれない、そうした迂闊にも見過ごしてきた様々なことも、これからの配処の暮しの中で、ゆつくり掬い出しておこう、と思ふのである。

承久の乱で敗れた順徳院は佐渡の地で自ら命を絶たれた。行在所であった黒木の御所跡の荒廢振りを見るにつけ、おいたわしく涙する。時代に翻弄され、「罪なくして」罪人になった先人たちを数え、時の勢いや流れが、人の力では抗し難い無常に心が沈む。どこかの能舞台で「俊寛」を演じている夢を見て、枕も頬もしとどに濡らしていた。「俊寛」を謡曲にしたのは元雅だった。俊寛と同様、赦免の知らせが来なくとも、自分の命の果てを見極め、後の世に能を鑑賞してくれるであろう有縁の人々、その寿福のために新しい能を書き遺してみようと思うのである。

最終章は、佐渡を訪ねた元能らしき僧に対して、女房語りの形式で、沙江という女の目から世阿弥の最期の姿が語られる。ここで世阿弥は沙江の十二才の息子に恋をして失っている。聴力が消えていく中で、「森羅万象の梵音に満たされ」て、『金鳥書』を書き上げ、目を盲いても自分を取り巻く快い静寂の中で軀も神経も研ぎ澄まされて、最期の最期まで、新しい能の創作に対する意欲を持ち続けてきたという。

「百年経てば舞台を観た人は一人もいなくなるが、能の

本は残っている。書いたものの命は強い。人間共通の愛とそれが巻起こすさまざまな悲喜こもごもが書かれている。運命に翻弄される人間の弱さも、それを撥ね返してさらに生きようとする人間の強さも。(略) 私たち三代が書いたものを、人はどんな時代が来ようと、自分のこととして受け取るだろう。」紫式部が『源氏物語』の作中で「物語論」を語らせたように、ここには書くということへの先生の確信が語られていると見受けられる。

あるドキュメンタリー作品に映っていた先生の姿を思い出していた。深夜にひとり小説に思いを巡らせていた先生のお顔は恍惚として至福に満ちていた。世阿弥が静寂の中で、ものを読んだり、書いたりする姿と重なってくる。

汲めども尽きない泉のように、あるいは抑えきれずに沸き上がってくる、抗いがたい衝動。芸術というものはそういうものから生まれるものではないかと、読んでいく内に思い始めた。鶴の正体がおぼろげに見えてくる。濃密な作品を読んだという満足感と、消化しきれなかった後味を残して、自分の中で発酵させていくのもまた読書の醍醐味かもしれない。